

即興型英語ディベートによる英語授業実践報告

—本校 65 期生・66 期生の授業実践を振り返って—

筑波大学附属駒場中・高等学校 英語科

須田 智之

要約

本校では英語授業のカリキュラムの中で、高校2年次の外国人講師との Team Teaching において、伝統的にディベートを扱っている。筆者は2012～2013、2015～2016年度の4年間に渡って、当該授業を担当してきた。しかし、学生時代のディベート経験が全く無く、また教員になってからも授業でディベートを扱ったことが無かったため、当初は「書籍などを参考に単に数回の対戦を実施する」という授業内容であった。転機となったのは2015年8月に、パラメンタリーディベート人財育成協会(PDA)主催の合宿・大会に参加したことであった。パラメンタリーディベートとは即興型ディベート、すなわち15～20分程度の比較的短い準備時間の後に対戦を実施する形式を指す。この合宿・大会への参加を契機に、徐々に英語でのディベート、特に即興型英語ディベートの面白さを実感出来るようになった。その後も、自らのディベート体験を積み重ねつつ、その指導法に関する理解を深めると共に、即興型英語ディベートの手法を取り入れた授業の教育的効果を最大限高めるべく指導技術の研鑽に励んでいる。また、2016年度からは即興型英語ディベートの普及にも力を入れて取り組んでいる。英語ディベートの魅力はそのゲーム性にあり、英語をアウトプットとして実際に使用できる環境が少ない日本にあって、その普及は日本人の英語コミュニケーション力の向上に必須の教育活動であると考えられる。

キーワード：ディベート、即興型英語ディベート、アウトプット、英語コミュニケーション力

1 はじめに

本校では英語授業のカリキュラムの中で、高校2年次の外国人講師との Team Teaching (以下TT) において、伝統的にディベート(日本国内では「ディベート甲子園」等、高校生対象の日本語ディベート大会も存在するが、本論文での「ディベート」は原則として英語を使用言語として用いる「英語ディベート」を指す)を扱っている。筆者は2012～2013、2015～2016年度の計4年間に渡って、当該授業を担当してきた。しかし、学生時代のディベート経験が全く無く、また教員になってからも授業でディベートを扱ったことが無かったため、当初は「書籍などを参考に単に数回の対戦を実施する」という付け焼刃な授業内容であった。指導方法を模索する日々が2年程続いたが、2015年8月に、パラメンタリーディベート人財育成協会(Parliamentary Debate Association, PDA)主催の合宿・大会に参加したことが大きな転機となった。

この報告では、4年間、特に2015～2016年度の授業実践に焦点を当てその指導実践を振り返ると共に、英語ディベート、特に即興型英語ディベートの教育的効果とその有用性について論じたい。

2 高等学校におけるディベート

2.1 ディベートとは何か?

「ディベートとは何か?」と問われた際に、何となく答えを思い浮かべることは出来たとしても、実際に指導した経験が有る教師は非常に少ないことが、ベネッセ教育総合研究所『中高の英語指導に関する実態調査2015ダイジェスト版』(資料1)から分かる。筆者の理解では「ディベートとはある論題について賛成と反対の2チームに分かれて行う討論ゲーム」である。それ故に、ディベートを楽しむ為には基本的なルール、試合の流れや時間配分、対戦における各選手の役割の理解など、ある程度のディベート経験が必要不可欠であると考えられる。

良くあるディベートに対する否定的な先入観の一つとして、ある論題についてディベートでは「例え自分の考えに反していても、与えられた賛成・反対のどちらか一方の立場に立って意見を述べなければいけない」ということが挙げられるであろう。また、もう一つの良くある否定的な先入観・本校での授業での実施初期にも多く聞かれる感想として、「ディベートでは対戦相手の主張の揚げ足取りをして、異論の言い合いに

なってしまう」という点が挙げられるであろう。

これらの否定的な先入観に対する反論として、筆者の考えではディベートとはあくまでゲームであるという点が重要である。即ち、ディベートとは「物事を多面的に捉える力・論理的思考力・コミュニケーション力等を鍛えることが出来るゲーム」であり、実践する事で学ぶ (Learn by doing) ことのできる技術なのである。ある論題について、与えられた立場で考えを展開することは物事を多面的に捉える力の慎重に繋がる。更に、ディベートとは相手を言い負かそうとするのではなく、聴衆・審判を自らの主張で説得しようとするゲームなのである。そのため、物事を分析する多面的視点や論理的思考力、またそれらを効果的に伝えるコミュニケーション力が要求される。

また、特に英語ディベートに関しては「英語が帰国子女やネイティブ並みに流暢でなければ不可能である・流暢であれば容易に可能である」という誤解も存在するように思う。しかしゲームである以上、単にネイティブスピーカーであれば誰でもディベートが簡単に出来るという訳にはいかない。勿論、英語が流暢なのに越したことは無いであろうが、これまでに述べてきたように最低限のディベート経験と多面的視点や論理的思考力、コミュニケーション力の訓練無しに、人は良いディベーターたり得ない。裏を返せば、ディベートは、いわゆる標準的な日本人学習者にとっても英語コミュニケーション力の取得・伸長というメリットを含めて、上記の様に様々な点において教育効果が期待できる活動であると言えるであろう。

一般にディベートの種類として、アカデミックディベート (準備型ディベート) とパラメンタリーディベート (即興型ディベート) の2つの形式が存在する。日本英語交流連盟 (English Speaking Union of Japan, ESUJ) のウェブサイトにはそれら2つの特徴が以下のようにまとめられている。

・アカデミックディベート

論題が半年から1年前に発表され、ディベーターは入念に準備を行う。専門知識、データ、統計などの事実と証拠 (エビデンス) 資料を用いて綿密な立論と議論を行う。

・パラメンタリーディベート

論題がディベート開始の20-30分前に発表されることから「即興型」のディベートとも言われる。ディベーターは自分の知識、教養、常識を活用し、短時間で論

点や立論の準備をして討論に臨む。幅広い知識と教養そして明快な立論が求められる。

2.2 日本の高等学校におけるディベート大会

日本の高等学校の教育現場において、ディベートは英語の授業での活動よりもクラブ活動として盛んに行われている様である。日本国内で開催される高校生向けの大会としては、主に3つの主催団体による大会、またそれらの大会に関連して開催される各都道府県別・地域別の大会等が存在する。

日本に於ける高校生向けの大会として、最も歴史が古くかつ国内で最も普及が進んでいるものが、一般社団法人全国高校英語ディベート連盟 (High School English Debate Association, HEnDA) 主催のアカデミックディベートの大会である。先日、2016年12月には茨城県の常磐大学高等学校にて、第11回の全国大会が開催された (参加チーム数: 64)。通常、全国大会の参加には地方大会へ参加、かつ好成績を残すことが義務付けられている様である。また、この大会の参加生徒による選抜チーム (かつては優勝校) に、高校生の世界大会である The World School Debating Championship, WSDC) への日本代表としての参加資格が与えられている。

一方、パラメンタリーディベートの大会としては、一般社団法人日本高校生パラメンタリーディベート連盟 (High School Parliamentary Debate Union of Japan, HPDU) 主催の第5回全国大会が、2016年3月に代々木の国立オリンピック記念青少年総合センターで開催された (参加チーム数: 23)。こちらの大会も、全国大会に先立ち県大会の開催が推奨されるなど、その普及が進みつつある。

また、もう一つのパラメンタリーディベート大会として、一般社団法人パラメンタリーディベート人財育成協会 (Parliamentary Debate Association, PDA) 主催の大会が挙げられる。先日開催された大会が第2回全国大会であったことから分かる様に、3つの大会中、最も歴史が浅い大会であるものの、50分の授業時間で対戦が完結可能な独自のフォーマットが用いられており、部活動のみならず普段の授業でもディベートを実施することが容易になった。第1回全国大会 (参加チーム数: 24校 36チーム) から第2回全国大会 (参加チーム数: 40校 64チーム) への参加校数の飛躍的な伸びからも、ディベートの普及への多大なる貢献が伺える。更に、2016年1月には埼玉県にて、2017年1月には大阪にて、海外からの高校生生

ームを招いての世界交流大会を実施するなど、国際交流の機会を提供してくれる大会として定着しつつある。

2.3 ディベート大会：今後の展望

以上、日本の高等学校における3つのディベート大会について概観したが、それぞれの大会に一長一短がある様に感じられるので、以下にそれぞれの長所と短所についての要点をまとめる。

1) HEnDA

(長所) 準備に期間をかけるので、英語が苦手な生徒にも比較的取り組み易い大会であると考えられる。また、物事を調査・分析する力、論理的思考力を養うのには効果的であると考えられる。

(短所) 全国大会を参観した限りでは、早口過ぎて理想的な英語からは程遠いという印象。学校英語教育の目指すべきコミュニケーションとしての英語とは、残念ながら現状がかけ離れてしまっている。

2) HPDU

(長所) 即興型ディベートの大会としては最高峰の大会であり、高校生ながら各参加チームの英語力の高さに驚かされる。全国の高校生、英語教員が目指すべき目標と言えるかもしれない。

(短所) 参加選手に留学生・帰国子女などの制限が無く、そういった選手を含むチームが有利な印象を与えてしまう危険性があるかもしれない。

3) PDA

(長所) 50分で完結するフォーマットの為、通常授業でも実施が可能であり、英語ディベートの普及という目的には最も適している形式と言える。

(短所) それぞれのスピーチ時間が短い為、議論に深まりが欠ける印象が否めない。また、規模の拡大に伴って、特にジャッジ(審判)の育成が急務であると思う。

この様に、それぞれの大会形式には一長一短があり、優劣を付けるのは難しい。しかしながら、各大会とも規模の拡大に伴って、その運営方法やレベルをより改善・向上していく必要があると思う。特に、HEnDAの大会を筆頭に、早口ディベート大会になってしまわない様に、ディベートがクラブ活動のみならず普通の授業でも取り上げられ広まって行く様に、アウトプットとしての英語の質にも注意を払いつつ、各主催団体

とそれぞれの大会関係者・参加選手が一丸となってディベートの普及に努めていく必要があるだろう。

高校生の大会や練習会を見て思うのは、選手たちのディベートへの熱意や努力を惜しまない姿である。外国語であるためたとえ英語を完璧に使いこなせず言いたいことが表現出来なくても、スピーチ時間を最後まで使って何とか自分の主張を伝えようという意気込みに溢れる高校生達の姿には感動を感じる。「ディベートが日本人の英語コミュニケーション力の向上に絶大な効果を及ぼす可能性がある」と思わせてくれる高校生諸君の姿が、ディベート大会では随所に見られる。

3 本校でのディベート指導の歩み

3.1 ディベート指導の概観

筆者によるディベート指導について、特に2015年度65期、2016年度66期への指導内容に焦点を当て、振り返ってみたい。なお、それぞれの学年に対する年間指導の流れに関しては、筑波大駒場論集第52集～56集も参考にされたい。

筆者が授業を担当した各年度を振り返ると、2012～2013年度は試行錯誤の時期であり、その授業内容は非常に後悔が残るものであったと言わざるを得ない。まずは、その1年前の2011年度から振り返る。

1) 2011年度

この年の高2英語のTTは、同僚の八宮孝夫教諭が担当されていた。私が英語でのディベートを初めて見たのは、八宮先生の授業での実践であった。当時は東日本大震災直後の時期であり、「原発は是か非か」といった論題が取り上げられていた。高校2年生達が流暢に英語を話す姿を見て、「自分が高校2年生を担当する際はこのレベルが求められるのだな…」と大きな刺激を受けた。

2) 2012～2013年度

2012年には『英語ディベート理論と実践』(玉川大学出版部)などを参考にしながら「日本の大学は9月から学年を始めるべきである。是か、非か。」という論題についてのディベートを学期末評価課題として実施した。2013年には同様に「縁日班は競りを廃止すべきである。是か非か。」「男性は人前で泣いてはならない。是か非か。」などの論題を学期末に実施した。2013年には帰国子女向けの英語力保持クラスREDsに時折出席し、中学高校生とチームを組んでのディベート体験なども試

みたが、振り返ってみると、「ディベートとは何か？」
「ディベートの面白さとは何か？」を実感出来ないまま、付け焼刃にディベートを実施しようとしていたのだと反省している。

3) 2014 年度

この年の高2 英語の TT は、同僚の秋元佐恵教諭が担当されていた。先生が夏休みに参加された PDA の研修会で多くのヒントを得られて授業でのディベート実践に活用されていた様であったので、筆者もぜひ翌年に参加してみたいと決意した。

4) 2015 年度

夏に大阪で行われた PDA 全国高校即興型英語ディベート合宿・大会 2015 は、高校生向けの英語ディベート大会と教員向けの講習会の2本立てになっており、生徒達の対戦(ラウンド)を観戦すると共に、ディベートを授業で実施している学校の実践例を学ぶことができた。何よりも、教員ラウンドでディベートを実際に体験できたことが非常に参考になった。

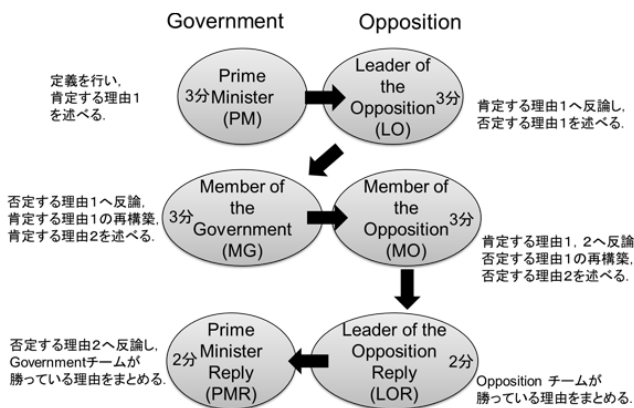


図1 PDA フォーマットでのディベートの流れ (参考文献『授業で出来る即興型英語ディベート』より抜粋)

この大会・合宿で紹介されていたのは、大阪府立大学の中川智皓助教の50分授業で1ラウンド完結可能なフォーマット(図1)であった。実際に授業でディベートを行う際の役割やルール、試合の流れなどについての資料集として、中川氏の著書である『授業でできる即興型英語ディベート』を参考にさせて頂いた。改めてここに中川氏へ感謝の意を表したい。

2 学期の授業では、モデルディベート“*We should allow the usage of cell-phones at high school.*”のスク립トを対戦形式で音読し、各スピーカーの役割と基本的なルールを理解させた後、数回のラウンドを実施

した。各ラウンドの論題(モーション)は以下の通りである。

・練習ラウンド×2回。

1. A robot dog is better than a real dog.
2. Space exploration is a waste of money.

・Performance Test として×6回

1. Lowering the legal voting age brings more benefit than harm.
2. Shinkansen passengers should have their baggage checked for security.
3. Ambulance services should be charged.
4. Homeroom teachers should be criminally charged for bullying.
5. Using a selfie stick in public space should be banned.
6. Domestic travel is better than traveling abroad for a school trip.

当初はクラス全体に対してのタイムキーパーを筆者が務めていたが、試合の進行(チェアパーソン)や審判による勝敗の決定とフィードバック(ジャッジ)の役割についても、生徒達を巻き込んで授業を組み立てていった方が良さそうだと気付かされた。

5) 2016 年度

これまでのディベート経験をもとに、毎年2学期を中心に行っていたディベートを1学期から通年で実施することにした。生徒達への指導に際しては、即興型英語ディベートに慣れ親しんでもらうことを目標に掲げた。また、11月に行われる本校の教育研究会の公開授業にて、高2 英語 TT でのディベート授業を公開することになった。

即興型英語ディベートの導入(各スピーカーの役割と対戦の流れの説明、モデルディベートの音読練習)は前年度の授業で実施済みであったので、スムーズにディベート実践に取り掛かることが出来た。1 学期の授業では、生徒同士のラウンドを4回程実施した。生徒は座席ごとのブロックで6人1班とし、その中で肯定側3人、否定側3人の2チームを作る。論題について、それぞれのチームで約20分の準備時間の後、別会場(Open Space B、通称OSBと呼ばれる集会スペース)にて対戦を実施した。論題は以下の通りである。

1. Celebrities who got accused of drug scandals should not be allowed to be back on mass media.
2. Using a selfie stick in public space should be banned.
3. We should introduce eco-tax.
4. We should outsource directing and coaching positions for club activities.

2 学期も 1 学期に引き続き、即興型英語ディベートを中心に授業を実施した。論題は以下の通りである。

1. “Pokemon Go” brings more benefit than harm.
2. Using normal housing as hotels brings more benefit than harm.
3. Driverless cars bring more benefit than harm.
4. Ambulance services should be charged.
5. When reading books, paper books are better than e-books.
6. We should make it mandatory for elderly citizens to return their driver’s license.

これらの授業で取り上げた論題は PDA から送られてくる論題（本校は PDA 学校会員なので論題が毎月送られてくる）や大会・練習会などで取り上げられた論題を参考にしている。特に、PDA 学校会員に提供される論題には、単語リストやニュース・新聞記事へのリンクが示されており、非常に重宝している。内容も時事的な題材が多く、生徒達にとっては良い刺激となっていると思う。2 学期には、特にインプットの増強を図る為、事前に論題と関係のある新聞記事や映像などをより活用するように心掛けた。生徒達が身の回りの諸問題への理解と考察を更に深められる様に工夫をすれば、ディベートへの興味関心や取り組みも更に深まるはずであると思う。

3.2 アンケート結果から見えてきたこと

1 学期末に、生徒の授業でのディベートへの取り組みに関するアンケート（資料 2）を実施し、各論題の難易度や英語力伸長に関する意識調査を行った。なおこのアンケートは日本高校生パラメンタリーディベート連盟の「第 5 回 HPDU 連盟杯 ディベーターアンケート」を参考に作成した。分析の結果、「Parliamentary Debate を通してどのような力が伸びたと思いますか」という問いに対しては、知識教

養・論理的思考・英語の語彙力に関しては約 50%、英語を聞く力は約 60%、英語で発表する力については約 70%の生徒がその効果を実感していることが明らかになった。更に、85%の生徒達が「即興型英語ディベートは将来役に立つ」と回答していることから、ディベートを実用的なスキルとして認識していることが伺える。一方で、英語の文法力やいわゆる大学入試突破に向けての効果に関しては肯定感が低く、今後の課題である（資料 3）。

3.3 映画『グレート・ディベーター 栄光の教室』

2 学期の特に文化祭直前の期間となると、生徒達も疲労困憊の色が濃くなる時期がある。そういった時期に無理をしないようにという訳ではないが、デンゼル・ワシントン主演の映画『グレート・ディベーター 栄光の教室』を見せることにしている。物語は実話に基づく黒人大学のディベート・チームの活躍を描いている。人種差別描写にショッキングな場面もあるが、最後のハーバード大学との対戦場面は非常に印象的で、ことばの力を実感できる映画である。これまで数年間に渡ってこの映画を生徒達に見せて来たため、映画と 1 学期末のアンケート結果を共に紹介するポスター（資料 4）を作成し、7 月に早稲田大学で開催された映画英語研究会にてポスター発表を行った。

3.4 ディベートの普及に向けて：公開授業など

2016 年の 11 月、第 45 回教育研究会にて「即興型英語ディベート」（高校 2 年生英語 TT）の公開授業を実施し、全国各地から参加の約 100 名の先生方・大学生に授業をご覧頂いた。その後の研究協議会では助言講師に筑波大学の卯城祐司教授、大阪府立大学の中川智皓助教を迎え講評を頂き協議を行った。

公開授業では“When reading books, paper books are better than e-books.”という論題について、試合の準備から対戦までの普段の授業の流れを 50 分間ご覧頂いた。ディベート大会の緊張と興奮を味わって頂くまでには至らなかったかも知れないが、「アクティブラーニングとしての英語ディベート」・「ディベートで行うアウトプット活動」の可能性を参加者の先生方には提示できたと自負している。

また、公開授業以外にも「ディベートの魅力をより多くの先生方に伝えたい」という思いから、その普及に努めている。いずれも主に現場で英語を教えている先生方に授業実践を聞いて頂き、充実した機会となった。以下にその例を幾つか挙げる。

・「即興型英語ディベート実践報告～英語授業の活性化を目指して～」英語授業研究学会 関東支部 第217回例会 研究実践報告 2016年10月 於：文教大学付属中学・高等学校

・「即興型英語ディベート」ELEC 同友会英語教育学会ビデオ部会1月例会 2017年1月 於：千代田区立九段中等教育学校

・*English Debate: A Revolution to English Education in Japan* The 19th Temple University Applied Linguistics Colloquium 2017年2月 於：Temple University Japan Campus

3.5 生徒の大会参加実績

これまで主に授業でのディベートについて論じてきたが、ここで本校の部活での取り組みについても紹介する。授業での実践に基づいて、2015年12月末に開催された第1回PDA高校生即興型英語ディベート全国大会に参加希望生徒を募ったところ、3名が参加して第4位入賞を果たした。更に、授業導入優秀校に選ばれ、翌年1月の世界交流大会への出場権を獲得した。その後3月のHPDU全国大会で2チームが予選敗退してしまったものの、春のHPDU新緑杯には3チームが出場し、あと少しで入賞(2勝1敗)という所まで漕ぎつけた。しかし、再び参加した2016年12月の第2回PDA全国大会では残念ながら予選敗退、2017年のHPDU東京都大会でも5位(5校中)と残念ながら戦績不振が続いている。本校で実施している放課後の課外活動English Room(外国人留学生を講師に迎えての英会話サロン)を活用しつつ、英語スピーキング力の増強を図りながら試合に勝てる英語力を養おうと画策したが、勝利への鍵は英語以外の部分にあるのかもしれない。

本校にはディベート部が存在しなかった為、生徒達を語学部という外国語や方言など言葉の学習や研究を行ってきた部活に在籍させ、可能な範囲で大会に出場させている。行事や部活、更には学校外の塾通いなどで多忙を極める生徒達なので、「ディベートだけを」・「部活で」やりたい生徒は希である。しかしながら、今後も授業でのディベート実践を続けつつ、大会情報などを生徒達に提供していきたい。授業での経験をもとに「よし、ディベートの腕試しをしてみよう！」という生徒が今後も現れてくれることを期待したい。

4 おわりに

日本の英語教育が抱える最大の問題点は、アウトプットの機会が不足している事である。英語が外国語の一つ(English as a Foreign Language, EFL)である日本国内の環境では、日常生活において英語を使用する場面は教室を離れてしまえばほとんど皆無である。このようなEFL環境にあつて、即興型英語ディベートはアウトプットの機会を保証する手段となると共に、様々な力を総合的に育むことが可能であると期待されている(図2)。

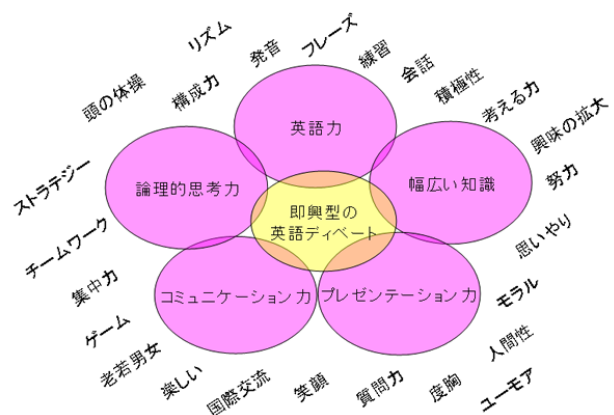


図2 即興型の英語ディベートで身につく力(参考文献『授業で出来る即興型英語ディベート』より抜粋)

授業でのディベート対戦では、各スピーカーはその役割に応じて2～3分間のスピーチをすることが求められる。論理的に分かりやすく具体例を織り交ぜながら話をするのは最初のうちは大変難しいが、徐々に長く話せる様になり、1試合約20分間に司会進行役やジャッジも含めて、全員が英語でのコミュニケーションに集中して取り組むようになる。ディベートの醍醐味はそのゲーム性であり、勝利の楽しさ・敗戦の悔しさが再びの挑戦、更なる高みへと選手を誘う。物事を多面的に捉える視点や論理的思考力を養うと共に、英語でのアウトプットの機会を確保し英語コミュニケーション力を伸長させる為にも、日本の教育現場におけるディベートの普及が急務であると考えられる。

【参考文献】

1. 木村治夫(2016)『中高の英語指導に関する実態調査 2015 ダイジェスト版』ベネッセ教育総合研究所
2. 松本茂ほか(2009)『英語ディベート理論と実践』玉川大学出版部
3. 中川智皓(2014)『授業で出来る即興型英語ディベート』
4. 一般社団法人日本英語交流連盟ウェブサイト「英語ディベート」<http://www.esuj.gr.jp/debate/> 2017年3月14日接続

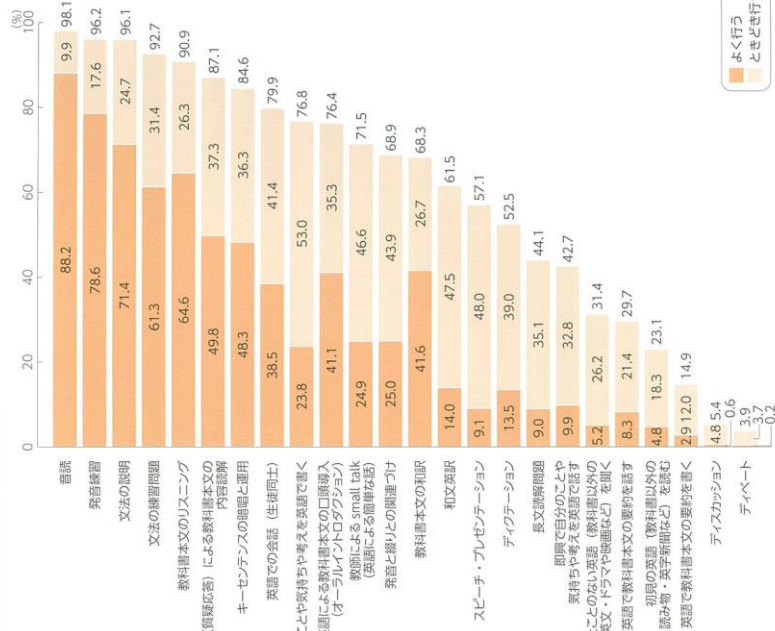
1. 指導の実態

中学校の授業では、音声・文法指導や「聞く」「読む」活動が中心。「話す」「書く」活動も多少行っている。

中学校の指導方法・活動内容は、「音読」「発音練習」「文法の説明」「教科書本文のリスニング」などが9割(「よく行う」+「ときどき行う」)の%、以下同)を超え、音声を中心にした指導や文法指導が多い。高校に比べ、「自分のことや気持ちや考えを英語で書く」「英語での会話(生徒同士)」「スピーチ・プレゼンテーション」は特に多い。

授業において、次のようなことをどのくらい行いますか。

図1-1 指導方法・活動内容(中学校)



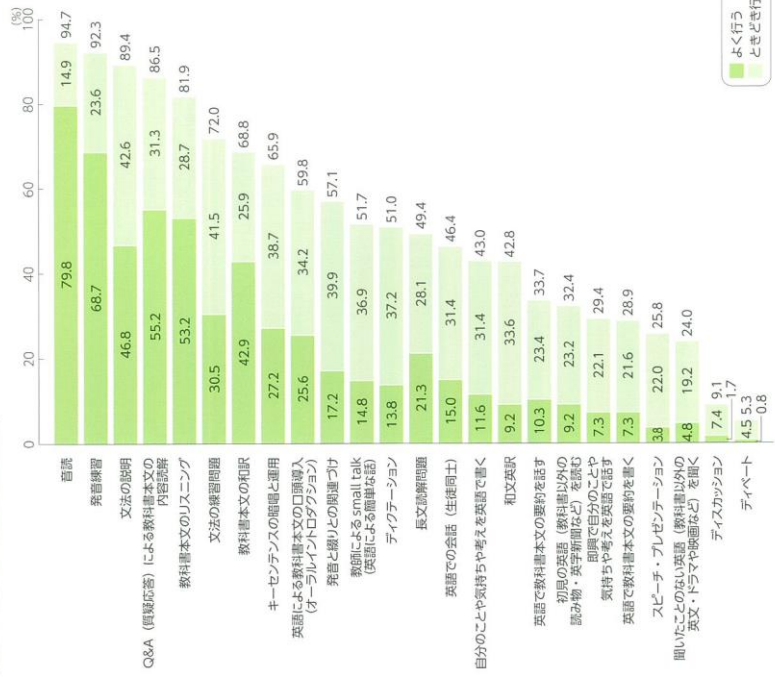
*各機種の外側にある数値は「よく行う」+「ときどき行う」の%。

高校の授業でも、音声・文法指導が中心。「話す」「書く」活動が少ない。

高校の指導方法・活動内容は、中学校と同様に「音読」「発音練習」「文法の説明」が中心で、これに対して、「自分のことや気持ちや考えを英語で書く」「英語で教科書本文の要約を書く」などの「即興で自分のことや気持ちや考えを英語で話す」「英語で教科書本文の要約を書く」などの「話す」「書く」活動の実施率は低く、特に「ディスカッション」「ディベート」は1割未満と低い。

授業において、次のようなことをどのくらい行いますか。

図1-2 指導方法・活動内容(高校)



*各機種の外側にある数値は「よく行う」+「ときどき行う」の%。

(資料2)「第5回 HPDU 連盟杯 ディベーターアンケート」を参考に作成した授業アンケート

Com英語Ⅱ アンケート

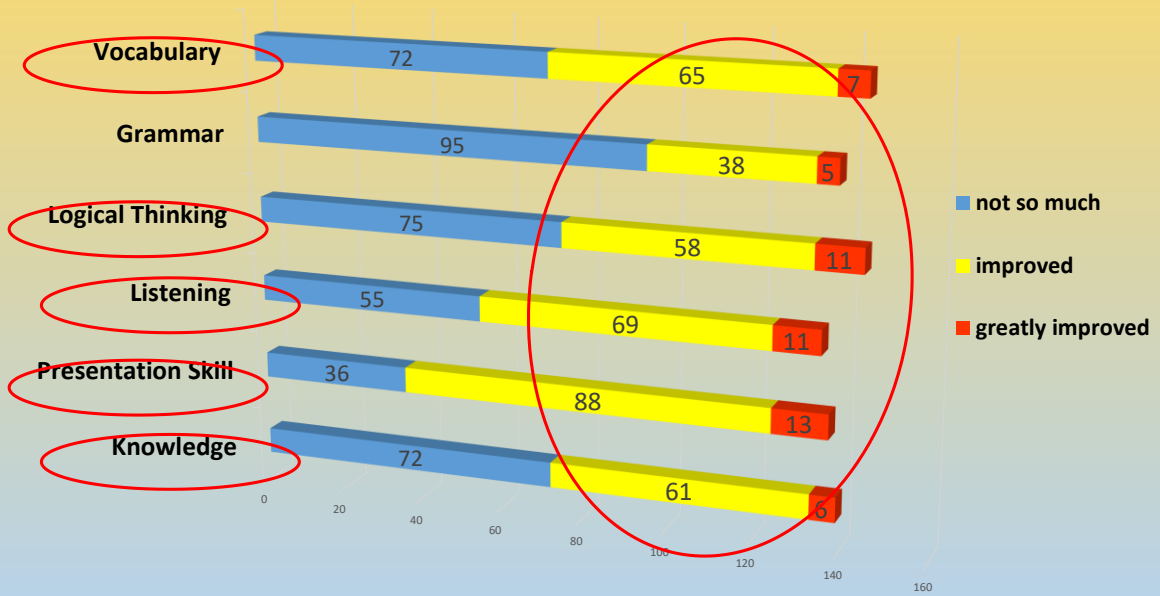
該当する数字を○で囲んで答えてください。

1	授業で扱った論題の難易度はどうでしたか。					
Round 1:	薬物依存になった有名人は復帰すべきでない。	① やりやすかった	② ふつう	③ 難しかった	④ ジャッジだった	
Round 2:	公共の場での自撮り棒の使用は禁止すべきである。	① やりやすかった	② ふつう	③ 難しかった	④ ジャッジだった	
Round 3:	環境税を導入する。	① やりやすかった	② ふつう	③ 難しかった	④ ジャッジだった	
Round 4:	部活動の顧問・コーチを外注化する。	① やりやすかった	② ふつう	③ 難しかった	④ ジャッジだった	
2	1学期の授業でよかったことは何ですか。					
【ア】	ディベートをする機会があったこと	① 全くそうは思わない	② そう思わない	③ どちらとも言えない	④ そう思う	⑤ 強くそう思う
【イ】	ジャッジの講評が参考になったこと	① 全くそうは思わない	② そう思わない	③ どちらとも言えない	④ そう思う	⑤ 強くそう思う
【ウ】	自分と同じチームの生徒を見て参考・励みになったこと	① 全くそうは思わない	② そう思わない	③ どちらとも言えない	④ そう思う	⑤ 強くそう思う
【エ】	対戦相手チームの生徒を見て参考・励みになったこと	① 全くそうは思わない	② そう思わない	③ どちらとも言えない	④ そう思う	⑤ 強くそう思う
【オ】	先生(Mr. Suda / Mr. Gordon)のアドバイスなどがあったこと。	① 全くそうは思わない	② そう思わない	③ どちらとも言えない	④ そう思う	⑤ 強くそう思う
3	ジャッジを担当した生徒は答えて下さい。					
【ア】	ジャッジをすることでディベートへの意欲が向上した	① 全くそうは思わない	② そう思わない	③ どちらとも言えない	④ そう思う	⑤ 強くそう思う
【イ】	その他あればご記入ください。					
4	Parliamentary Debateを通して、どのような力が伸びたと思いますか。					
【ア】	知能教育	① 変わらない	② 伸びた	③ 大いに伸びた		
【イ】	英語で発表する力	① 変わらない	② 伸びた	③ 大いに伸びた		
【ウ】	英語を聞く力	① 変わらない	② 伸びた	③ 大いに伸びた		
【エ】	論理的思考	① 変わらない	② 伸びた	③ 大いに伸びた		
【オ】	英語の文法力	① 変わらない	② 伸びた	③ 大いに伸びた		
【カ】	英語の読書力	① 変わらない	② 伸びた	③ 大いに伸びた		
5	Parliamentary Debateについてお答えください					
【ア】	Parliamentary Debateは大学受験に役立つと思いますか。	① はい	② いいえ			
【イ】	Parliamentary Debateは将来役立つと思いますか。	① はい	② いいえ			
【ウ】	Parliamentary Debateは2学期の授業でもやりたいと思いますか。	① はい	② いいえ			
6	その他何かありましたらご記入ください。					

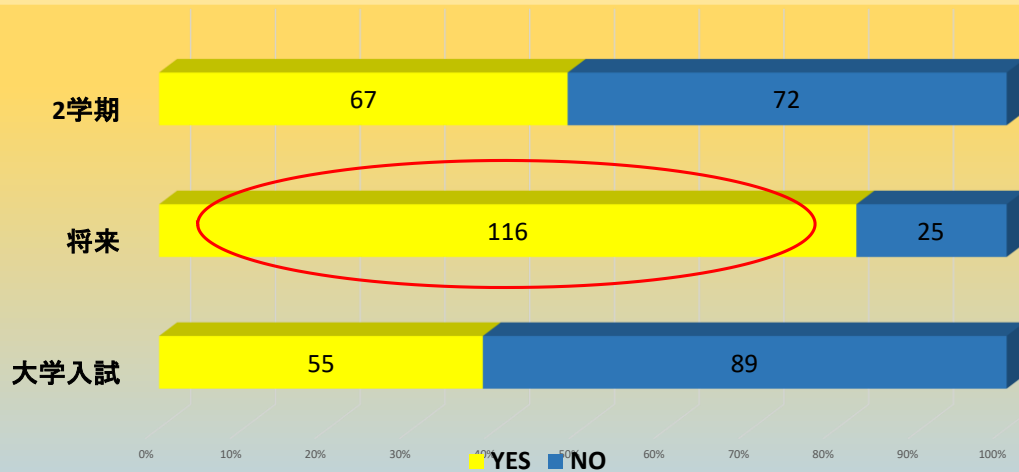
御協力ありがとうございました。

(資料3)

Parliamentary Debateを通して伸びたと思う力



- Q1. Parliamentary debate は大学受験に役立つと思いますか。
Q2. Parliamentary debate は将来役立つと思いますか。
Q3. Parliamentary debate は2学期の授業でもやりたいと思いますか。



(資料 4)

The Great Debaters: English Debating for Classrooms in the Globalized Era

SUDA Tomoyuki

Junior and Senior High School at Komaba, University of Tsukuba

Story



Denzel Washington's *The Great Debaters* depicts the fervent struggle of the first Negro college debaters, who competed against the white college debaters in the U.S., in 1935. It was the time when segregation still ruled the minds of the people.

However, in the movie we can learn **the importance of language**, which has the power to change the world. Great speeches surely have changed our minds and made our society a better place. Language can change the world. The speech given by James Farmer Jr., one of the main characters of the movie, tells us this important thing, **the power of words**.

Student's Comment (2015)

"Great Debaters" would become one of my favorite movies. I was so impressed by this movie. This movie expresses the complicated feelings of sensitive adolescents very well. And they grow through the story with a wonderful teacher, struggling with the situation the black people had to face in those days. **The last scene was amazing---as if I was hearing a symphony. Through this movie, I realized the power of words. I want to enjoy the next debate lesson.** (65th M.I.)

Competitions in Japan

Academic Debate
= HENDA
△ speak very quickly



Parliamentary Debate
= HPDU, PDA

PDA = a format designed for 50 minutes lesson

△ not enough time??

English Debate Lesson in Tsukukoma

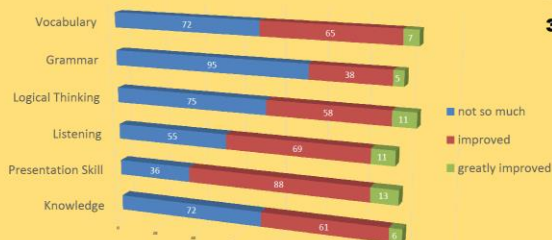


< 4 Motions for Spring Term >

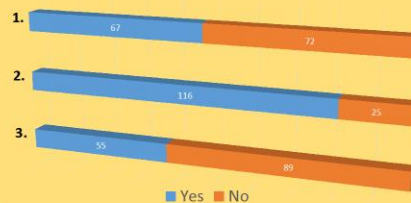
- Celebrities who got accused of drug scandals should not be allowed to be back on mass media.
- Using a selfie stick in public space should be banned.
- We should introduce eco-tax.
- We should outsource directing and coaching positions for club activities.

Reflections on English Debating

What do you think you improved through Parliamentary debate?



1. I want to have parliamentary debate lessons again in fall term.
2. Parliamentary debate is good for our future.
3. Parliamentary debate is good for college entrance exams.



In the Future (Globalized Era), we need ...

In parliamentary debate, ... If you end up just making "one-way" declarations, you cannot win. In such a process, you also need to try to see **how things might look and what you might think if you put yourself in the other person's shoes**. In short, you need **empathy**.

Mr. NUMATA Sadaaki Chairman, The English-Speaking Union of Japan

